

Colette Dowling, *The Cinderella Complex*

—Women's Hidden Fear of Independence—

(1981) の二つの訳

宮 井 敏

事は旧聞に属するが、free writer の Colette Dowling が1981年に New York の Summit Books から出版した上記の著書が bestseller となり、20数ヶ国で翻訳され、日本語版、木村治美千葉工大教授の『シンデレラ・コンプレックス——自立にとまどう女の告白——』（三笠書房、東京、1982）も爆発的な売れ行きを示して、60万部を超えたと云われている。

しかるに、3年後、同じ三笠書房からあらためて『全訳版』と銘打って、柳瀬尚紀成城大助教授の翻訳が出された。古典の世界は別として、現代作家の作品がベスト・セラーとは云え、わずか三年の間に、しかも同じ出版社から別人の手で新訳が出されると云うのは極めて異例の事であろう。そこに何が起こったのか、何故そうなったのか、を探りつゝ、翻訳のあり方、翻訳者の姿勢についてしばらく考えて見たい。近頃、原文の個々の字句に対する珍訳、誤訳の指摘が盛んであるが、当然の事ながら、それ以前の、文化事業である筈の出版業のモラルの問題や、文筆業者である翻訳者の節度の問題も論ずべき対象であろうと考えるからである。

問題は、何故木村訳が最初から抄訳とことわらなかったのか、と云う事から始まる。なるほど、訳者あとがきに、「日本語版になおすに当り、冗慢な部分や日本の実情にあわない例などを削りました」とあるが、ジャケット、帯、表紙、扉を含めて「抄訳」という文字は一切見当たらない。およそ三分の一に当る部分が削除されているにもかかわらず、である。そして、これを受けた形の柳瀬訳では、前著とほぼ同じイメージのデザインのジャケットに麗々し

く『全訳版』と銘を打ち、帯には「読者待望の全訳版ついに刊行」とあり、「柳瀬直紀の歯切れのよい新訳を得て、ミリオンセラーが生れかわる」とある。もちろん、わざわざ「抄訳」とうたっていないくても、事実はかなりの部分省略されている、と云う事は出版界ではまゝある事であろう。問題は、原文からの削除の量が常識を越えない範囲のものであるか、と云う事と、omitした箇所が全体を把握する上から支障のないものであろうか、と云う事になろう。

本書の場合、原著のほうは柳瀬氏が「訳者あとがき」で語っているように、「著者は実に丹念に——ほとんど真面目すぎる位に丹念に——シンデレラ・コンプレックスを検証してゆく。そこがいやおうなしに読者をひきつける筈だ。また、そこが単なる思いつきで書かれた薄べらな女性論と本書を明確に区別」しているのである。原著者は、自己の生長体験を軸にして、free lance journalistとしての取材、調査による豊富な事例を psychoanalysis の方法を駆使して論をすゝめてゆく。そのためには数多くの著名な psychiatrists の発言や著書からの引例が不可欠であり、全篇を通じて、長いもので1箇所2ページ以上にもわたる注釈が合計して110箇所、35ページ分、巻末につけられており、さらに引用文献の書誌も12ページに及んで詳細に記されている。

また、原著の英文そのものも、決して軽快なよみやすい文体ではなく、その点、鈴木俊次金沢大助教授の英文テキスト版（抜萃）（英宝社、昭57）も、翻訳書が世上に流布している点を除けば、じっくりと読み込む講読の教材としては好個のものと思われる。要するに、原著はそのきわめて journalistic で topical な title にもかゝわらず、内容的にはがっちりした辛口の評論であり、全体の構成も緊密で引例にも重複無駄はなく、その語り口はむしろ地味で重い。これを云いかえると、全体の三分の一までも「冗慢な部分」（木村訳、あとがき）として削除し、全体の六分の一に及ぶほう大な注釈、書誌をあっさり切捨て、しまえるような代物でない事だけはたしかであろう。

外山滋比古お茶の水女子大学教授は、中公新書の『日本語の素顔』、『日本語の個性』の中でそれぞれ、英語の文章におけるパラグラフ構造の重要性と、その構成の緻密さを説いて居られる。それは「堅固なものであり、ちょっとやそつとで切れないような密度をもっている」とのべている。今回のような場合、二つの訳をくらべて読んで見ると、読者の理解を助ける上で重要な働きをしたと思われる報告、引用、が少なからず削除されており、又、削られている箇所を補って見てはじめて木村訳の意味がとれる所も見うけられる。木村氏の処女作、エッセイ集『黄昏のロンドンから』のあとがきに、恩師外山滋比古氏に対する謝辞がのべられているが、今少し木村氏が、そもそも翻訳なるものを始めるに当って外山教授の名著と呼ばれるもののいくつかに目を通していられたならば、と願うのは私ばかりではあるまい。

ともかく、不幸にして原著は「要点紹介に近いような日本流の抄訳」を拒否するものをもっており、その硬質の文章、緊縮した構成、無駄のない事例の紹介には、そもそもそれにふさわしい取り組み方と云うものが最初からあるべきである。原著者の意図を無視して、ただ読みやすく、取付きやすく、と願って、各章を勝手に二分して、前段を独白として「である」調、後段を分析・解釈部分として「です・ます」調で訳しわけて見たところで、又、冒頭のたゞの地の文章を詩につくりかえて全体のトーンづくりに役立てようとしたところで、さしたる違いがあるわけでもなく、結局は原著に対して訳者がミスキャストだったとしか云いようのない事なのではなからうか。『言語』1984年5月号で、木村氏自身が「あの本と私とは特別の関係にあったと云ってよく」、「この本を訳す適作者（原文のまゝ）は私よりなかったと大胆に云わせて載いてもお叱りはうけないでしょう」とのべて居られるにもかゝらず。

又、同氏は「あの本の印象は文体によってずい分変っていたと思います」（同上書）とも云うが、それはまさにその通りであって、木村訳は原著とは別の「何ものか」を生み出した事になろう。たまたま、それが時流に投じて

何十刷を重ねるに到ったと云う事は全く別個の問題に属する。あたかも上述の書物『黄昏のロンドンから』が1977年度大宅壮一ノンフィクション賞を受賞しながらあちこちで激しい批判が相ついだのと同じような事になるのではあるまいか。

氏は重ねて「私は訳者であると同時に演出家でもありました」とも云うが、成程、ドラマの原作を舞台の上で生かすも殺すも演出家の腕次第であろう。だが、シナリオのみをたよりとして、舞台装置を指揮し、配役を行ない、演技指導をしつゝ、原作のもつかくれた意味をさぐり当て、非再現芸術としてこれを観客に呈示する演出家と、異文化を別種の言語で解釈して紹介する翻訳者との間には degree の差こそないにせよ、kind の差は厳然と存在する。もしも、翻訳者が演出家を気取るならば、それは云う所の「換骨奪胎」つまり、全く別のものを主観的に恣意的に生みだした事にしかならないと思われる。

柳瀬訳で読んだ読者なら、全文の末尾のところに自由へと飛躍した女の感動の体験がはなはだ感動的に描かれている事を知るであろう。何人かの女性読者にとって、その polyandry に近い free な性生活が、自分自身の道徳観と違っているにもせよ、引例の女性の「高揚したエネルギー」に束縛から解放された自由に生きる女の喜びを見出して、強い共感を覚える筈である。よし又、百歩譲ってその行為に激い反発を覚える人があったにせよ、こゝに書かれているのは、センセーショナルな誇張や意図的歪曲の全くない、極めてクールに見た現代アメリカ社会の一断面である。日米間に無数の情報が巨大な量で日々交換されている時、「私はコレットさんよりはモラリストなのです」と云って、「アメリカ女性の自由と自立が誤解されかねない」(前掲書)のおおそれてカットして一体何の意味があるのだろうか。こゝに到って同氏は「演出家」から「検閲者」に変貌したのである。

原作者 Colette Dowling 女史は1984年末第3日して各紙のインタビューに答え、自らの執筆態度、製作意図について多くを語り、木村訳のみに接して

隔靴搔痒の感もだし難かった多くの読者に満足を与えた。たゞ、この時出版社側が計画した原作者と訳者の対談を木村氏側が拒否した事から、訳者と出版社の間に齟齬を来し、それが1985年の柳瀬新訳を生む一つのきっかけになったと云われている。

その後、1986年6月、『朝日ジャーナル』は神戸女学院大学教授 Catharine Broderick 女史を招いて、根本的に問題を掘下げて、日米間の「シンデレラ・ギャップ」について特集を組んだが、添えられたコラム「抄訳と全訳にみるギャップ」が、再び話題を呼んで、そのあと数週間「抄訳」のあり方を厳しく批難する投書が同誌に相ついだ。

さて、以上のような手きびしい批判、「競訳」、対談の拒否という事態を前途にして、訳了直後の木村氏には、「この訳書はおそらく原書よりも完成されたものになったと信じます」（訳者あとがき）、とか「日本版は原書よりも、もっと完成され、魅力的になったものと信じます」（前掲書）と云った強烈な自信にみちた発言が見られる。今この姿勢を、前述の大宅賞受賞、エッセイ集、『黄昏のロンドンから』刊行後のかまびすしい批難の中にその原流をさぐって見よう。

この書物はかつて『英語文学世界』に連載していた「ロンドン通信」をまとめてPHPから出版されたもので、筆者自身の1974年8月から、1975年3月に到る8ヶ月間の滞英記録の連載を、1976年11月初版として出版し、1977年春、第8回大宅壯一・ノンフィクション賞を受賞したものである。出版直後から現在のイギリス事情に関心のある多くの人々の注目を惹き、歴史と伝統に富む、はなはだ複雑な社会構造の側面を、短時間の狭い観察で断定的に記述する危なかしさを指摘する声が高かった。1978年9月の雑誌『自由』に井上和子氏の「イギリス誤聞物語」と題する批判が掲載されたが、さらに同年11月、雑誌「Voice」に「『イギリス誤聞物語』は誤解」という筆者自身の反論がよせられ、1981年3月、雑誌『中央公論』には井上和子氏の「大宅賞受賞『黄昏のロンドンから』は事実にも間違いが多すぎる。その

上著者のもの見方はずい分一人よがりではなからうか」と云う小見出しをつけた再反論「誤解さればなしのイギリス」が話題を呼んだ。大方の見るどころ、「勝負あった」と云う感じで、この完膚なきまでの理路整然たる再反論に対する有効な反撃は今に到るまで目にする機会を持ち得ていない。むしろ、朝日新聞前ロンドン特派員浅井泰範氏の『七色のロンドン』（朝日ソノラマ、東京、1977）に見られる「日本でベストセラーになったロンドンの生活体験をまとめた本にはずい分思い切った表現が多い。敢えて云うのだけれどもやはりロンドンは、わずか8ヶ月、それも限られた世界での体験だけで断言するのはこわい都市なのである」と云う発言あたりが平均的な感想として定着したと見るべきであろう。「結局、損をしたのは賞を出した方じゃないか」と云う声と共に。

ところで、一つの問題が残るのは『黄昏のロンドンから』14ページの「今やロンドンの人口の七割が移民だそうです」と云う箇所をめぐる論争である。木村氏は雑誌『Voice』での井上氏の指摘に対する反論の中で「私がロンドンの移民七割説を聞いたのはケント大学で人種問題を研究するインドの大学院博士課程の学生から」だと云い、「七割と云う数字がおかしいと思われるなら、七割もいるはずがない、という表現のほかに、それではどのくらいか、はっきりした数字が示されるべきです。それでは何割なのですか」とある。同一趣旨の発言は文庫本に収録された同書（文春文庫、1980年）の「あとがき」にも見られ、「七割説への反論の致命的な欠点は、七割と云う推定値をくつがえす根拠がなにもないことだ」と云う。生活実感や社会常識から来る直感的な反発は、生活体験の重みがあればなおさら、それなりの有効な反論と充分なり得ると思うのだが、御希望ならば数字的データも提出するにやぶさかではない。朝日新聞前ヨーロッパ総局長（ロンドン在住）青木利夫氏の『ロンドンからの手紙』（朝日新聞社、東京、1978）第三部「いけにえにされる移民」p. 208には、「日本のさるベストセラーには、いまやロンドンの人口の七割が移民だそうです、と書いてあるそうだが、まさかそんなことは

ない。それでも英国の人口五千六百万のうち、移民は二百万、うち黒人が百七十五万人 (3.2%) だ。ロンドン人口七百五十万の五パーセント以上にあたる四十万が黒人とされている」とある。ロンドン人口750万の七割、525万が非アングロ・サクソン系移民だとしても、イギリス全土の移民200万の三倍近くになってしまう事になる。出口保夫早大教授はどう見るだろうか。「戦後イギリスは旧連邦内の国々からの移民を受け入れて来た。その数は1977年には百八十万人に達し、十年後の八七年には二百五十万人になるだろうと予測されている」(『クオリティ社会の風景』 ジャパン・パブリッシャーズ、東京、1978)。その上、「ブリテン島をめぐる移民の動向は1964年から75年まで一貫して流入よりも流出が多く、いわゆる第三世界からの労働力の流入は、イギリスからの流出を補うにも足りないものだ」と云うデータもある。(降旗節雄『イギリス・神話と現実』 五月社、東京、1978) なお、くわしくは大阪市立大学経済研究所がすすめている「世界の大都市研究」そのⅠ『ロンドン』と云うものもあるが、もはや充分であろう。要するに、物書きにとって、それが non-fiction である以上、事実の確認を怠ってはならぬこと、hasty conclusion は避けねばならぬこと、そして何よりも、批判に対しては謙虚であるべき事がまずイロハ中のイロハ、と云う事になるうか。

以上、翻訳書を出版する出版社の姿勢、これと馴れ合う翻訳者の態度、さらには営業政策優先の出版社系文学賞の詮衡の粗漏をいささか検討して見た。が、それでもこの事例の場合、直ちに無茶な削除を回復して、別人の手によって新しい全訳を出すという点、まだしも良心的であると云える。山本七平訳、J. K. ガルブレイス『権力の解剖』(日本経済新聞社、東京、1984)の場合など、訳そのものはさておき、巻末の訳者解説は、ガルブレイス理論を用いたケース・スタディとして田中角栄弁護論を展開したもので、激しく反発する声も聞かれた。原著者のあづかり知らぬこうした「解説ならぬ解説」は、出版者、翻訳者ともにモラルの点から批判をまねがれ得ないところであろう。巨額の翻訳権料が噂されるこの書物のような場合、ありきたりの翻訳

者では売れゆきがおぼつかない、との営業的見地から notorious な右派の論客を起用し、彼またこゝぞとばかり解説に名を借りて持論を展開したのであろうが、大企業や軍部の権力の集中の危険を訴えている原著の論旨とはおおよそそぐわぬものである事だけは確かなことであろう。

類似のケースは河本英三訳、ラルフ・ネーダー『どんなエピソードでも自動車は危険だ』（ダイヤモンド社、東京、1969）に見られる。この場合はネーダー理論の核心ともなるべき「汚染への原動力」と云う一章が全く削除されていた上に、訳者の巻末解説が原著者の意図にそぐわない、とあって、版元のグロスマン社（ニューヨーク）が契約違反として追及する構えを見せ、訳書の回収騒ぎにまで発展することになったのである。

むかし、思想の科学社がF. L. カーステンの『ファシズムの勃興』を翻訳出版したところ、あまりの誤訳のひどさに、絶版発売停止とし、1970年11月号の『思想の科学』誌上の社告で、購入された読者には返本すれば代金を返すと発表して、当時話題を呼んだが、これなどは、それでもまだ責任感のある方だと云える。百目鬼恭三郎氏が雑誌『現代』誌上で1981年11月、指摘した例には次のようなものがある。森秀人訳、アイザック・ウォルトン『釣魚大全』については、もともと、1971年2月号の『英語青年』誌上で、小池銈氏が数十ヶ所にわたる誤訳を手厳しく指摘していたのであるが、あらためて「角川選書」に入れるに当って、指摘の箇所には何等手を加えないまま出版した、と云うのである。良心を問われるべきは、出版社か、訳者か、その双方か、と云う事になるのだが、本当に両者が協力してよい翻訳を出そうというケースは残念ながらそう多くはない。特殊な専門書の場合だが、オハイオ州立大学教授の生態学者、Paul A. Colinvaux の著書『猛獣はなぜ数が少ないか——生態学への招待——』を訳出するに当って二人の訳者、樋口広芳、渡辺政隆両氏が原著者との頻繁な連絡の上で、原著に見られる過ちや、くどい表現、等を十分な了解を得た上で、削除、修正して出版した、と云う（早川書房、東京、1982）。

それにしても、原著書の十分な了解を得ない削除や解説はよほど原著者、原著出版者が目を光らせているか、かなり精密な契約書をかわしていない限り防げないことになる。著作権の所在が物故した原著者の手をはなれて、転々としているような場合、少なくとも原作者からの直接の抗議は受けなくてすむことになり勝ちである。さきのアイザック・ウォルトンの「釣魚大全」など、それ故にこそ、あまたの誤訳指摘に頬被りして、又ぞろ別の出版社から出そうか、と云う事になりかねない。もっとひどいのはジュール・ベルヌ「十五少年漂流記」の場合である。1888年に「二年間の休暇」という題名でフランスから出されたものを森田思軒が1896年に「十五少年」として世に問うたが、これが達意の名文で以後90年間、無数の「訳」と称するもののほとんどはこの森田訳の現代語訳になっている。もちろん旺文社文庫の金子博訳は直接原文からの直訳であるが、それでもまだ「完訳」とはうたっていない。これにくらべると、新潮文庫の波多野完治訳がいまだに英訳からの重訳であるのは権威ある出版社・訳者としては、はたしていかがなものであろうか。

以上、翻訳出版をめぐるさまざまな事例を上げて見たが、皆藤幸蔵訳（累計四百万部といわれる）以来34年ぶりに、幸いに人を得て、関係各方面との十二分の諒解のうちに深町眞理子氏の「新訳」『アンネの日記』が、多くの関係者の祝福のうちに出されることになったのであるが、これなどはまことに例外的にさわやかな出版界の話題といえるであろう。

不朽の名訳とされるアーサー・ウェーレーの『源氏物語』さえ、最近は、「鈴虫」の帖をはじめ、その大幅な削除が若い研究者の間では翻訳者の節度をこえるものとして問題になっていると聞く。1936年のこと、ロイド・ジョージを訪れた駐英ソ連大使マイスキーが、今ロンドンで流布しているヒトラーの『我が斗争』英訳版にはフランス・東方への侵略計画の部分が全く欠如している事を指摘してこの元首相、自由党々主をがく然とさせた話が残っているが、結局、心すべきは、主観的、恣意的拔萃をさけること、己を虚うして伝達者に徹すること、可能な限り原作者と接触を保つこと、出版社の営業政

策に鋭く目を光らせること、これが翻訳者の最低の「モラル」なのではな
らうか。